２０２４．７．２１（日）使徒１７：１０～１５

17:10 兄弟たちはすぐ、夜のうちにパウロとシラスをベレアに送り出した。そこに着くと、二人はユダヤ人の会堂に入って行った。
17:11 この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、はたしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べた。
17:12 それで彼らのうちの多くの人たちが信じた。また、ギリシアの貴婦人たち、そして男たちも少なからず信じた。
17:13 ところが、テサロニケのユダヤ人たちが、ベレアでもパウロによって神のことばが伝えられていることを知り、そこにもやって来て、群衆を扇動して騒ぎを起こした。
17:14 そこで兄弟たちは、すぐにパウロを送り出して海岸まで行かせたが、シラスとテモテはベレアにとどまった。
17:15 パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行った。そして、できるだけ早く彼のところに来るようにという、シラスとテモテに対する指示を受けて、その人たちは帰途についた。

＜説教＞

「使徒の働き」17 章に入り、テサロニケの町にヨーロッパで２番目の教会が始まったことが記されます。そこでもパウロはいつものようにユダヤ人の会堂に行き、三回の安息日にわたり聖書に基づいて会堂に集まった人々と論じ合い、「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と説明し、また論証しました(2-3)。その結果、〈彼らのうちのある者たちは納得して、パウロとシラスに従〉い、また〈神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たちも同様で〉した(4)。そのときのことをパウロは後にテサロニケ教会に送った手紙で次のように言っています。「私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いた…。あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました」（Ⅰテサロニケ 1:5-6)。

そのようなテサロニケでも悪魔の攻撃がありました。ねたみにかられたユダヤ人たちが、パウロとシラスを探してヤソン（「ヨシュア」をギリシア風に呼んだ名を持つユダヤ人）の家を襲い、二人が見つからなかったのでヤソンと兄弟たち何人かがまるで二人の身代わりのように町の役人たちのところに引かれて行き、保証金まで取られ、やっと釈放されたのでした(6-9)。

そのように、パウロとシラスの身に危険が迫ったので、テサロニケ教会の〈兄弟たち〉が〈すぐ、夜のうちにパウロとシラスをベレアに送り出し〉ました(10a)。ベレアはテサロニケから西に 80 ㎞ほどにありました。ベレヤでも二人はユダヤ人の会堂を見つけるとそこに入って行きました(10b)。もちろんイエス･キリストの福音を宣べ伝えるためです。そこでもテサロニケと同じように〈聖書に基づいて〉論じ合い、説明し、論証したのではないでしょうか。ベレアではどういうことになったでしょう。

〈この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことば

を受け入れ、はたしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べた。それで彼らのうちの多くの人たちが信じた。また、ギリシアの貴婦人たち、そして男たちも少なからず信じた。〉(17:11−12)ということになりました。ベレアではユダヤ人たちのうちの〈多くの人たちが信じ〉、また〈ギリシアの貴婦人たち、そして男たちも少なからず信じ〉ました。その前のテサロニケではユダヤ人たちの〈ある者たち〉が〈納得してパウロとシラスに従〉ってイエス・キリストを信じ、〈神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たちも〉同じでした(4)。ざっと言えば、パウロたちの宣教によってイエス・キリストを信じた人々が、テサロニケではユダヤ人は少なく、ギリシア人（異邦人）が多かった。逆にベレアではユダヤ人が多く、ギリシア人が少なかった。そんな風に見えます。特にユダヤ人に関する限り、テサロニケにいた人よりベレアにいた人の方がイエス・キリストを良く信じたのでした。

この違いはどこにあったのか、ルカは記しました。〈この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、はたしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べた。それで彼らのうちの多くの人たちが信じた〉(11−12a)と。

まず、ベレアのユダヤ人はとにかく〈素直〉でした。「素直」と訳された言葉は、本来「生まれ育ちが良い」「身分が高い」という意味ですが、そこから「ゆったりとした、余裕がある、自由で寛大で偏見がない」そしてという意味にもなったようです。自分たちが今まで先祖代々語り継がれ教えられ習って来た〈聖書〉の解釈と、このたびパウロとシラスが語った〈聖書〉の解釈が違いました。特に焦点は、神の約束のメシア（キリスト）についてでした。パウロたちは「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と〈聖書に基づいて〉論じ、また論証しました(2−3)。「苦しみを受け、殺され、しかも死者の中からよみがえる」キリストなど聞いたことも考えたこともありませんでした。更に、「ナザレのイエス」なる人物が、〈聖書〉に書いてあるとおりに〈苦しみを受け〉十字架につけられ殺された。しかもそれはあなたがたの罪のためだった（とパウロは話したに違いありません)。そして聖書に書いてあるとおりに〈死者の中からよみがえら〉れた。それゆえ、「このイエスこそキリストです」とパウロは説明し、論証したのです。

そのように、この度ベレヤに来たパウロたちが、自分たちがこれまで読んで来たのと同じ〈聖書〉を用いて、〈聖書に基づいて〉話す「ことば」―〈みことば〉(11)―を〈非常に熱心に〉聞きました。「自分たちの解釈と違う」と言って金輪際耳を塞ぐということはしませんでした。反発する思いが少しもなかったのか、初めはあったけど途中から消えたのか、その辺はわかりません。しかしとにかく彼らは〈非常に熱心にみことばを受け入れ〉ました。彼らのうちに聖霊が働いておられたことは明らかです。それで偏見なしに、〈はたしてそのとおりかどうか〉、つまり「パウロたちが言っていることが本当かどうか、調べてみよう」と実際に聖書を改めてしっかりと、じっくりと、厳密に、客観的に、冷静に読んだのです。それは言うまでも無く、「聖書が正しいかどうか」ではなく、「パウロたちの言っていること、解釈が正しいかどうか、聖書に書かれているとおりかどうか」を調べたのです。

そのように聖書を調べることは一日二日でできることではありません。当然のように〈毎日〉となりました。しかし彼らは忍耐強く〈毎日聖書を調べ〉ました。彼らはパウロの語

った〈みことば〉を思い起こしつつ（もしかしたらパウロやシラスのところに改めて行くか、彼らを呼んだかしたかもしれません)、自らの手で聖書をめくり（実際には巻物をほどいたのでしょうか)、自らの目で（場合によっては声に出して）聖書を読み、自らの頭で考え、〈聖書を調べ〉ました。それらを神に祈りつつしたことでしょう。

〈それで彼らのうちの多くの人たちが信じ〉ることとなりました(12a)。〈ギリシアの貴婦人たち、そして男たちも少なからず信じた〉(12b)のも、ベレアのユダヤ人たちの姿が良き影響を与えたからでもあったと思います。

「門から入るのは羊たちの牧者です。門番は牧者のために門を開き、羊たちはその声を聞き分けます。牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。」と主イエスは言われました(ヨハネ 10:2−4)。

相変わらす頑なにイエス・キリストを信じようとせず、〈非常に熱心に〉パウロたちを迫害しようとするユダヤ人たち(13)がいる中で、ベレヤのユダヤ人たちは確かに牧者イエス・キリストの声を聞き分ける、キリストの羊でした。私たちもキリストの羊として、聖霊の助けにより、〈非常に熱心に〉〈毎日聖書を調べる〉者でありたいと願います。